

◆インターネット活用教育実践コンクール実行委員会賞◆

〈学校教育部門〉

「ネット保育の実習実践」

岐阜県立岐阜総合学園高等学校

〒500-8289 岐阜県岐阜市須賀2-7-25

■実践事例報告の概要

本校は生活福祉系列の授業の一環として保育実習を実施しており、取り組みの一つとして人形劇を通じた活動を展開してきた。これまでは、保育所を訪問しての披露や、産業教育フェアでの体験発表によって学習効果を高めてきたが、時間的・物理的制約により、授業時間での展開が難しいという問題点があった。今回、テレビ会議システムを活用し、これら問題点を克服し、さらに付加価値をも見いだすことができたので、研究の成果を報告する。

実践のねらい

本校総合学科の生活福祉系列では、2年次生の必修科目の一つとして「児童心理」(4単位)があり、生徒たちは保育士・社会福祉士を目指して学習を進めている。平成14年度は29名(うち男子2名)が履修した。学習の成果を生かすべく、児童との交流を体験させたいが、実際に生徒が訪問して実習を行うには時間的制約や物理的制約がある。

そこで、テレビ会議システムを活用して、生徒の手作りの人形劇を鑑賞してもらう保育実習を、県立岐阜希望が丘養護学校の児童との交流で実践した(写真)。

特徴・工夫・努力した点

生徒たちを5グループに分け、それぞれのグループが一度ずつの発表を行い、計5回の保育実習を行った。発表対象の児童が小学部の1年生から6年生までであり、毎回学年が異なったため、生徒は題材の精選、表現方法・言葉の選択等にも工夫を重ねた。授業の仲間を対象に発表する場合、照れくささや恥ずかしさが先行してしまい、発表への取り組みを不十分にしてしまいがちである。しかし、児童に人形劇を鑑賞してもらうことになって生徒は豹変した。どのグループも真剣勝負であった。グループ内で練習時間を調整し、部活動終了後に練習時間を設け、また休日を返上して準備に勤しんだ。

視力、聴力、言語に何らかの障害をもつ子どもたちに、いかにして自分たちの手作りの人形劇を理解してもらうか。それは未知の世界への挑戦でもあった。さらにその子どもたちは、自分たちと向き合っているが、画面を通してである。その最大の難関を克服するため、生徒たちは養護学校の先生と実習のたびにテレビ会議システムを利用して事前打ち合わせをした。生徒たちの発表を観た養護学校の先生から厳しいコメントが出る。「そんな声では聞こえない」「どの人形が喋っているのかわからない」等々。その指導を受けてさらに練習を続けた。

画面を通じた人形劇にはまだ課題がある。舞台の下からの演技のため、ともすると画面の枠から人形が外れてしまう。また、人形の動きが速すぎると上手く映らない。生徒たちは画面を通して、人形の配置や動かし方、背景の位置を繰り返し確認した。

実践内容

〈第1回〉平成14年10月28日(1、2限)／担当生徒6名／人形劇「リトルマーメイド」・手遊び(手をたたいたり、指・手を使って動物を作る)

初めてのテレビ会議での交流で、発表する側は緊張の連続だった。

〈第2回〉平成14年12月16日(1、2限)／担当生徒6名／人形劇「みにくいアヒルの子」・パネルシアター(パネルを使った絵遊び)

男子(1名)がはじめて参加した。画面を通しての呼びかけに対して児童からの応答が出てきた。

〈第3回〉平成15年1月27日(1、2限)／担当生徒6名／人形劇「裸の王様」

簡単なメロディの歌を取り入れ、今まで以上に児童の興味を引くのに成功した。

〈第4回〉平成15年2月6日(3、4限)／担当生徒6名／人形劇「ハム太郎と愉快的仲間達」

本校の学校(部活動)紹介を人形と生徒が会話しながら行う。アドリブが入り、生徒の中にかなり余裕が出てきた。

〈第5回〉平成15年2月17日(5、6限)／担当生徒5名／人形劇「アンパンマン達と学ぼう生活習慣」・これまで交流した各班の紹介

子どもたちのヒーロー、アンパンマンが「挨拶」「歯磨き」「手洗い」の大切さを訴えた。交流の中で生徒たちが訪問する約束を交わし、春休み(3月)に訪問をした。

第1回から5回まで実習後には常に反省会を開き、人形劇の内容に関する反省点だけでなく、テレビ会議システムゆえの問題点について生徒同士で討論した。それを次回の実習につなげていくことによって、児童との距離を縮めていった。

実践結果

5回の保育実習を通して、この新しい取り組みが新たな授業形態になるという感を一層強くした。第1・2回目は、マスコミによる取材のカメラが入り、見学者も多く、授業後は取材に応えるなど仰々しい雰囲気の中で実施された。しかし、回を重ねるごとにテレビ会議システムにも慣れ、また児童との交流も深まったこともあり、ごく自然な雰囲気の中での授業となっていく。

今回の保育実習が、従来の保育実習よりはるかに多くの、また異なった問題を浮上させ、生徒たちはそれを乗り越える努力・協力・練習の必要性に直面した。そのことが生徒をさらに成長させたと確信する。

生徒たちは面識のない児童に向かって、通常の保育実習とは異なるさまざまな問題点を見事に克服して、5回の保育実習を終了した。以下、実習を終えた生徒の感想を紹介する。



写真・養護学校の児童と交流する生徒たち

「笑顔の大切さ、笑顔を作っていないと子どもたちが安心しないみたい」「笑顔は自分の心を表すような気がした」「笑ってくれると、自分自身がとても嬉しくなり、後で笑うことがすばらしいことだという意味がわかりました」。また、多くの生徒が「仲間から、児童から多くを学んだ」と感想の中で書いている。

考察(今後の課題)

今回の児童との交流では、当初の目的であった時間的・物理的制約を乗り越えた実習を見事に成功させた。しかし、それ以上に、テレビ会議システムを利用した保育実習には次のような利点があると生徒が述べており、注目に値する。それは、通常の保育実習では常に児童とマンツーマンの実習形態となることが多く、自分自身のことで精一杯となり、お互いを客観的に評価し合う余裕もないまま終了してしまう。しかし、こういったシステムを活用することによって、別の角度からも情報を得ることができ、学習効果を高めることができる。

当初耳にした「訪問して実習を行えばすむことを、どうしてテレビ会議システムなのか」との声に対しても、それを通してでなければ得られない学習成果があるとの観点から、「テレビ会議システムでなければならない」と明言できる。今年も10月から月1回、計5回のテレビ会議システムを活用した保育実習を実施する。今後も、通常の保育実習と併せて継続して活動を展開し、より効果的な手法を模索していきたいと考えている。